

今朝は「母の日礼拝」です。全人類に共通することは、自分を産んでくれた母がいる、という事実です。既に世を去ったお母さんも多いでしょうが、自分に命を与えてくれて、育ててくれた人への感謝の思いは、私たちに祝福の源を教えてください。

母の日の由来

1908年、米国ウェストヴァージニア州ウェブスターの教会で、一人の夫人の記念会が行われました。その人の名前はジャービスさん。26年間もCSの先生をした熱心なクリスチャンでした。その三年記念会を、娘のアンナさんが開き、お母さんが愛したカーネーションの花を列席者に贈りました。その感動が5月第二日曜日を「母に感謝する日」として行われるようになり、デパート王ジョン・ワナメーカー氏のキャンペーンにより米国全土に周知されるようになりました。1914年、国の祝日に制定。日本には、宣教師らによってミッションスクールや病院で、この習慣が広がり、教会はもちろん、今では誰もが知る行事として定着しています。

母の幸せ

ジャービス夫人が、教会学校の中で繰り返し教えたことは「父と母を敬え」であったそうです。アンナはその教えを守り、記念会を開いたのでした。これは、モーセの十戒という神からの定めの一つです。前半は神と人間の関係について、後半は人間同士の関係についての定めとなっていますが、その真ん中で、蝶番のような役割をしているのが、この「父と母を敬え」という5番目の教えなのです。これは、母や先祖という存在が、自分自身にとって、神様という大きな存在に心を向ける、一番大事な人間であるということをお母さんが教えてくれます。お母さんが幸せであるなら、それは世界が幸せである、と言っても過言ではありません。そして、お母さんにとっての一番の幸せは、その子どもが健やかで、自分の愛を受けとってくれているという実感以上のものはないでしょう。ですから、母への感謝は、世界の幸せの不可欠な要素なのです。

神の導きと慰め

母への賛辞と祝福が、母の日の第一義ですが、それは実はもっと大切な真実につながっていることを、決して忘れてはいけません。それは、見えない神の導きと慰めを見出すことです。イザヤ書は、全知全能の神様の救いを力強く預言していますが、その主題のモチーフとして、羊飼いに導かれる、羊の親子の情景が用いられています。神様の慰めは、私たちがふところに抱いてくださる約束です。その持ち運ばれる私たちの後を、母羊が続いています。私たちの存在を通じて、その母も導きを受けているのです。この見えない神の慰めと導きを見出す時、神の救いは、どれほど温かく、祝福がその魂に届くことでしょう。今日が、平和の源に触れるとなりますように。